

スポーツ施設としての「道路」の条件

Road conditions as a Sport institution

1K05B209

指導教員

主査 岡浩一朗先生

松田 大介

副査 中村好男先生

1. 研究の背景と目的

生活習慣病への関心、健康指向が高まる時代となり、身体活動(運動)が生活習慣病の予防・治療に有益なことは多くの人々が認識していることである。しかし、運動を実践することはすべての人にとって、必ずしも容易なことではない。この運動を推進するために、個人を取り巻く環境、特にこの調査では「スポーツライフ・データ 2004」内の運動・スポーツを行う施設の種類の種類では 56.1%と 2 位以下を倍以上の差で 1 位となった「道路」に注目する。現状として、この最も身近で手軽なスポーツを行う環境である道路は「運動する場所」または「スポーツ施設」として認識をすることは少ない。それは道路は行政が中心となって整備するもので、車中心で計画・整備され、歩行者などにとって、快適な運動空間として捉えられることは少ない。しかし、自治体の特徴的な取り組みで、歩きやすい道がある街の例として、「横浜市の一連の都市デザイン」として 2006 年度のグッドデザイン賞金賞を受賞した横浜市の取り組みから、ヒントを得て、今回の研究に至った。今回はランナーやウォーカーなど、普段から道路を使用して運動する人たちが必要とする道路の要素について、調査用紙を用いて調査し、この結果から、どのような道路が求められるのか、分析・考察した。

2. 方法

本研究の調査対象者は、早稲田大学の学生、競走部の中距離・長距離ブロックの部員、所沢市西地区総合型地域スポーツクラブの陸上競技クラブのRコースの会員(有効回答者 162 人)であ

った。

3. 結果

- 本研究から、以下の点が明らかになった。
- ・「交通量(車)の多さ」、「歩行者の多さ」、「事故や危険な場所の多さ」など、道路自体のスペックの項目ではなく、その周辺の環境や外的な要因が多くの人々にとって関心がある点であった。
 - ・道路での運動の際、「いつも」音楽を聴いている人よりも「あまり」聴かない人のほうが運動時間が長い。
 - ・運動中に「時間」を記録している人が多く、「歩数」を記録する人はあまりいなかった。
 - ・横浜市の「開港の道」のような遊歩道が整備された場合、利用する意欲のある人が 8 割を超えるなど、利用に意欲的であった。
 - ・道路づくりで自分が「積極的に意見を出していきたい」と回答した人は「事故や危険な場所の多さ」、「自転車の多さ」、「店などの出入り口の多さ」の 3 項目で他の回答をした人と差が出た。この 3 項目は接触事故に関わる(つながる)項目であり、危険に対する意識が高いことがわかった。
 - ・道路づくり(【Q.7】)での意欲的回答群と非意欲的回答群では、やはり公共事業での遊歩道づくりの質問(【Q.6】)での回答に違いが現れた。
 - ・性別の違いによって次の 4 項目には違いがみられ、「街灯の有無」、「排気ガスの多さ」、「事故や危険な場所の多さ」は女性の関心が高く、

「道路標識の多さ」は男性の関心が高かった。

- 道路での運動を行う人の群と行わない人の群では、「歩道の段差」、「事故や危険な場所の多さ」、「店などの出入り口の多さ」の 3 項目で有意な差が出た。
- 運動時間の長さの違いによって関心の違いが出たのは「縁石の有無」であった。

4. 考察

今回の調査の有効回答者の 61.1%がランナー、ウォーカーは 10.5%であり、一般の方よりもより道路で運動している人が多く、道路と接する時間がたくさんある回答者であったため、これから道路で運動を始める人にも参考になる要素がたくさんあるだろう。また、道路だけではなく、その周辺の環境や、人や車の動きに関しても関心が高く、

運動しやすい道路の構成要因となるので、そういった動きも計算された計画が自治体には必要である。もちろん女性が安心できる、障害者が安全に使えるような道路自体のスペックの向上も必要である。また、渋滞によって排気ガスも増えるので、渋滞のおきにくい交通網を作成していく必要があり、これは道路だけではなく、その周辺に立地する施設によって変化するので、それらの情報を把握して、交通量を調整することができれば、理想とする道路に近づけよう。

今回の調査で、実際に道路を使っている人が計画の段階で積極的に意見を出したいという意欲があること、また、プロムナードの整備に対して肯定的な意見が多かったため、そういった住民がいることを踏まえた道路づくりがこれからの自治体には必要となるだろう。